



幼稚園における「自ら学びをつなぐ子どもの育成」

副園長 高 田 和 宜

やまぐち学園では、11月27日に幼小中一貫保育授業づくり研修会を開催し、県内外の先生方に保育・授業を公開し、これまでの取組や実践研究の成果をお伝えする機会をもちます。幼稚園の研究では主に、園での遊びや生活の中で子どもたちが見つけたり、気づいたりした「!」「?」の姿に着目し、その姿がどのように学びにつながっていくのかを検証し、そこでの保育者の援助や環境構成の工夫のあり方を探ることに努めています。

教育実習や運動会が終わり、季節も秋らしくなり、子どもたちは自然とかかわって遊ぶ姿が多くなってまいりました。一貫教育で取り組んでいる研究の視点で子どもたちの遊びの姿を見ていくと、主体的に遊びを楽しむ姿だからこそ、それぞれの子どもの興味関心に基づいて確かな学びの芽が育まれていくことに気づかされます。

10月22日に全園児で散歩に出かけました。世界の森公園や亀山公園などで虫や木の実を探したり集めたりして楽しみ、園にも持ち帰ってきました。花組のテラスには持ち帰った様々な木の実が大きなたらいに集められています。そこから気に入ったどんぐりとメタセコイヤの実を一つずつ選び、水を入れたプリンの容器に入れて眺めている男児の姿がありました。その姿を見て女児も真似をしてプリンカップに水を入れどんぐりを入れていました。二人がプリンカップをのぞきあっているものを見せてもらいました。すると男児のドングリは沈んでいましたが、女児の入れたどんぐりは浮かんでいました。それに男児が気づき、「緑（緑色のドングリ）は浮かぶんだ。」といって緑色のドングリを取りに行きカップに入れました。その緑のドングリは沈みました。「緑でも沈んだね」と保育者が声をかけると「そうだいこと考えた」と男児は飼育ケースのおおきいものを取りに行き、水をたっぷり入れました。ケースのたっぷり水をぽちゃぽちゃはねてこぼしながらもどうにか自分でテラスまで運び、いろいろなドングリを入れて沈むのか浮かぶのかを女児と二人で試していました。「小さいのに沈んだ」と驚いたり、どんぐりの帽子を船のように浮かべてみたりと様々な実験が行われていました。最後にはたっぷりとドングリを入れたものを手でかき回して二人で歓声をあげていました。写真での記録では、水槽にドングリを入れて遊んでいる姿になりますが、そこでの言葉や反応をつぶさにとらえると様々な学習につながる学びの芽がたくさんあることが分かります。まず、同じどんぐりでも浮かぶものと浮かばないものがあるという気づきから、「比べたい」という意欲につながっています。たくさんものを比べるために容量の大きいものを準備する必要を感じ、自分で比べるための環境を整えています。小さいのに沈む（大きく重いドングリが浮かび小さく軽いのに沈む）という現象への気づきは何年か後の小学校での浮力の学習や中学での質量の学習とつながるとき、幼児期のこの体験があることで実感をもって学んでいくことでしょう。ここでの「なんで?」「不思議?」「そうだ!」「いいこと思いついた!」はその後の学習だけではなく、豊かに生きていく上での「非認知能力の向上」につながっています。

夢中になって遊べる子どもがかしくなっていくことは幼児教育では周知のことですが、主体的に遊びを楽しむことが主体的に学ぶ姿へとつながっていくことも小学校・中学校の先生方にも伝わればと思います。

各保育者が日常の子どもの姿を写真とともにお伝えしていますが、そこからも保護者の皆さまに園の実践研究の取組の良さを感じていただければと思います。

